

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：23501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00420

研究課題名(和文) ジャポニスムとモダニズム 展覧会とエスニック・マイノリティ作家たちの挑戦

研究課題名(英文) Japonisme and Modernism: Exhibitions and the Challenge of Ethnic Minority Writers

研究代表者

中地 幸 (Nakachi, Sachi)

都留文科大学・文学部・教授

研究者番号：50247087

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、19世紀後半から広く欧米に広まったジャポニスムと20世紀初頭の世界で大きな波となっていくモダニズムの関係を当時開催された展覧会とマイノリティ作家たちの作品を紐解くことで再定義しようとするものである。調査はプリミティヴィズム、シノワズリー美術、アフリカ・オセアニア美術等も含めて広く行ったが、焦点となったのは、野口米次郎を中心とする芸術家ネットワークだった。その関連で、海外における浮世絵の流通や日英博覧会における光琳美術のインパクト、日本の元禄ブーム、シカゴ美術館でのフランク・ロイド・ライトによる浮世絵展、ジョン・グールド・フレッチャーやエイミ・ローウエルの詩についても検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「オリエンタリズム」すなわち西欧の東洋への眼差しのポリティックスの視点を基軸としたポストコロニアルな文学・芸術論は西洋と東洋の不均衡な関係を明らかにしたが、欧米社会で抑圧されてきたアジア系あるいはアフリカ系などのエスニック・マイノリティの作家や芸術家たちが、いかにオリエンタリズムの機構を利用しながら活躍していたかについてはあまり目配りをしなかった。しかしながら、ジャポニスムとモダニズムの興隆にはエスニック・マイノリティ芸術家や作家たちの積極的な介入も大きな位置を占める。本研究の意義は野口米次郎に焦点を当てながら、その点に取り組み、ジャポニスムとモダニズムについて再考した点にある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to examine the relationship between Japonisme, which spread widely in Europe and the United States from the latter half of the 19th century to the beginning of the 20th century, and Modernism, which became a major art wave in the world at the beginning of the 20th century. I explored this topic by focusing on the exhibitions held at that time and the involvements of minority artists in them. The research was conducted widely, including Primitivism, Chinoiserie art, African and Oceanian art, etc., but the main focus was on the artist network led by Yone Noguchi who published English essays and poems on Ukiyoe prints. Along with Noguchi's writings, the topics such as the circulation of ukiyoe prints in the US, the impact of Korin's art at the Japan-British Exposition, the Genroku boom in Japan, the Japanese print exhibitions by Frank Lloyd Wright at the Art Institute of Chicago, and the poems of John Gould Fletcher and Amy Lowell are examined.

研究分野：文学

キーワード：Japonisme Modernism Yone Noguchi Ukiyoe Primitivism

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究開始まで、筆者は、『蝶々夫人』や『神々の寵児』におけるアメリカ人作家の東洋幻想と世紀末趣味の交錯やリチャード・ライトの俳句とアフリカン・アメリカン・ジャポニスムの問題、ネラ・ラーセンの東洋趣味と北欧ジャポニスムの関係、野口米次郎の「日本主義」における反ジャポニスム姿勢などを考えてきた。本研究では、この一連の問題にさらに踏み込み、19世紀末から20世紀前半という時代に焦点をあて、芸術家同士の横軸の発掘や文学と美術の相互関係について調査し、考察することにした。とりわけジャポニスムとモダニズムの関係を考えることは課題であった。

(2) そもそもジャポニスムは西洋モダニズムに対する浮世絵の影響という形で多く論じられてきたが、その論じられ方は限定的であると同時に、西洋モダニズムという既存の運動や芸術形式への影響という意味でその関係は位置づけられてきたように思われる。しかしジャポニスムはもっと西洋モダニズムの内部の中に入り込み、様々な形式や次元で、もっと根本的なレベルでモダニズムに関わっていたのではないかという疑問、また実はアジア系の作家や芸術家が、これまで考えられている以上に、大きな役割を果たしていたという問題を突き止めたいと思ったのが研究の始まりであった。

(3) アジア美術もアフリカ美術の非西洋美術としてモダニズムの作家たちを魅了したわけだが、「ジャポニスム」ブームを岡倉天心や野口米次郎が利用したように、アフリカ系アメリカ人作家たちは「アール・ネーグル」ブームを自らのアイデンティティを主張する拠り所として利用した。1910年の日英博覧会は英国におけるジャポニスムブームを加熱させ、また1914年のニューヨークの「292」ギャラリーにおけるアフリカ彫刻展示はアフリカ・ブームを起こした。その他、1935年にロンドンで開催された「中国芸術国際展覧会」や同年ニューヨークのMOMAにおける「アフリカの黒人芸術展」はアジア系やアフリカ系の作家たちの活動に大きな影響を与えたものと考えられる。本研究では、このように時代的な流れを意識しながら、展覧会がどのようにエスニック・マイノリティの作家たちの欧米進出を助け、またその文学作品を形作っていったかを検討するものであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ジャポニスムに沸いた20世紀初頭の欧米の展覧会が与えたインパクトやマイノリティ作家たちの戦略的なジャポニスム、モダニズムへの介入を調査することにより、西洋による東洋文化のアダプションの枠の中でのみ考えられたジャポニスムとモダニズムの再考を促すことであった。また文学と美術が領域との交錯を、単に西洋と東洋だけでなく、西洋とアフリカをも視野に入れることにより、ジャポニスムを多面的に考えていくことも大きな目的であった。

3. 研究の方法

(1) 研究は、図書館データベースや美術館展示資料などを利用した文献調査と資料調査

を中心としたもので、歴史的視点から研究を行った。また国際学会での発表を行い、適宜、研究者からの意見を募り、論文執筆を行った。

(2) 野口米次郎の英詩と大英博物館のローレンス・ビニヨンのアジア美術の受容を中心に論文を執筆した他、ビニヨンや欧米のジャポノロジストたちの美術史、美術展、コレクションを調査した。またフランク・ロイド・ライトが関わったシカゴ美術館の浮世絵資料などの調査を行った。国内図書館でも本件に関わる 20 世紀初頭の雑誌や新聞記事などを収集した。

(3) 欧米美術館のアジア・コレクションとアフリカ・コレクションについて調べると同時にアジア系とアフリカ系のモダニズム文学における交差点を調べた。コロナ禍にあって、欧米での調査が難しかったために、アメリカの研究者との交流を深め、情報や資料を得た他、アドバイスをいただいた。

4. 研究成果

(1) 初年度 2018 年度はモダニズムの定義について、アジア系アメリカ文学を考察した論文を発表し、また野口米次郎とローレンス・ビニヨンの関係について、ハワイの国際学会で口頭発表を行った。また野口の英詩について『現代詩手帖』の特集号に記事を書き、アメリカで野口とエズラ・パウンドについて研究をする伯谷嘉信氏の論文の翻訳も行った。国際文学美術館学会でも発表し、海外での東洋美術受容の調査他、日本の仏教美術や琳派、浮世絵、柳宗悦の民藝運動との関連を中心とした調査も国内外で行った。

(2) 2019 年度の研究は野口米次郎の浮世絵論に焦点を当てて行った。野口の美術論、とりわけ英語圏の雑誌に発表された美術論は散在しており、また野口は日本語でも様々な雑誌に書いているので、古い雑誌記事の収集はかなり時間がかかった。今回はデータベースを見たり、国内外の図書館に赴いて調査を行ったが、結果、英文記事は 14 本、日本語記事は 11 本、英語出版は 11 冊、日本語出版は 12 冊が見つかった。インドの神智学協会から出版された本はメルボルンの図書館で見ることができた。おそらくもっと出版物はあると考えられる。また野口の日本語の美術論が英語の美術論とどのように重なり、どのように違うのかについては余り検証されていないが、その点についても詳細に調べた。

(3) 2020 年度は野口米次郎の英語での日本美術論とりわけ浮世絵論についての論考を都留文科大学の大学院紀要に発表した。また浮世絵を題材としたアメリカ詩を調べ、エイミー・ローウェルやジョン・グールド・フレッチャー、アーサー・フィッケについて調査した。ローウェルのイマジネーションの源となったのは兄 パーシヴァル・ローウェルの日本滞在である。またフレッチャーは、シカゴで浮世絵展を見て、その作品について詩をつくった。このシカゴの展覧会については 当時の展示目録資料を調べ、浮世絵作品とフレッチャーの詩を詳細に比較してみた。展覧会には建築家のフランク・ロイド・ライトも関わっており、展

示の仕方も浮世絵だけを展示するのではなく、各箇所に盆栽などを置いて、独特なモダニスト的な雰囲気のある会場となっていたことも明らかになった。そのせいか、フレッチャーの詩は非常にモダニスト的な詩で、日本人の目から見るとあまり浮世絵的雰囲気を表しているとは思われないが、これこそが欧米の浮世絵受容の好例といえる。一方、フィッケは日本に対してロマンチックな憧憬があり、イギリスのロマン派詩人サミュエル・テイラー・コールリッジの詩のイメージが作品に見られた。これらの詩人たちは、イマジズム運動と関わっており、いかに欧米のモダニズムの詩の生成に日本文化受容が関与しているかを確認することができた。浮世絵受容が俳句や短歌の受容と並行しており、フレッチャーのような詩人の中では両者はほぼ同じ概念の芸術としてとらえられていることも重要である。この調査についてはジャポニズム学会の40周年記念国際フォーラムで発表を行った。

(4) 2021年度は、2021年2月にジャポニズム学会の40周年記念フォーラムで発表した論文をもとにしながら、これまでに調査研究した野口米次郎と浮世絵との関係を「ジャポニズムから日本主義へー野口米次郎の浮世絵詩と浮世絵論を中心に」という論文にまとめ、『ジャポニズムを考える 日本文化表象をめぐる他者と自己』(思文閣、2022)に投稿した。この論文を書き上げる中で、野口とイマジズム詩人たちとの関係、1912年の日英博覧会における光琳の展示、またそれについての野口の詩とその詩におけるアインシュタイン理論の影響などが見えてきた他、海外の浮世絵ブームと日本の元禄ブームなど、日本文化への関心が、海外と日本においてある意味パラレルに進んでいたことも理解することができた。また野口とアメリカ詩人アーサー・デイヴィソン・フィッケやジョン・グールド・フレッチャーとの関係も読み解くことができた。アメリカの浮世絵詩についてはさらに調査していく課題となる。また2021年度は小泉八雲にも範囲を広げ、調査を行ったほか、横山大観や藤田嗣治といった画家についての調査も行い、野口との共通項(とりわけ戦争協力)などの考察を行った。野口の仏教や能への強い関心がどのように形成されたのかについても調査を行った。本プロジェクトの第三の目的であるアフリカン・アメリカン・ジャポニズムの研究についても、ネラ・ラーセンとプリミティヴィズムの関係の資料調査を海外研究者の助けを借りながら行った。

(5) 最終年2022年度は、これまでの研究のまとめに取り組んだ。「ジャポニズムから「日本主義」へー野口米次郎の浮世絵論と浮世絵詩を中心に」は『ジャポニズムを考えるー日本文化表象をめぐる他者と自己』(思文閣)に2022年4月に発行されたが、この成果は研究者に送り、様々なフィードバックをいただいた。また本期間中の研究成果の一部は、11月に開催されたルカス・ブルナ氏主催の国際シンポジウム「ヨーロッパの女性が見た日本(ルカス・ブルナ氏科研費研究プロジェクト「チェコ女性作家B・M・エリアーショヴァーと日本旅行記・ジャポニズム文学の研究」)で発表した。最終年度にあたり、展覧会が文学作品に与えた影響について総括的な調査を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中地幸	4. 巻 25
2. 論文標題 野口米次郎の英文日本美術論と海外との交友	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 都留文科大学大学院紀要	6. 最初と最後の頁 55-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中地幸	4. 巻 6号
2. 論文標題 野口米次郎の日本美術論とその背景	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヨネ・ノグチ学会Newsletter	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中地幸	4. 巻 20
2. 論文標題 「メタモダニズムとトランスパシフィック・モダニティの時空－チャンネ・リーの『ジェスチャー・ライフ』におけるフォークナーへの遡行」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『フォークナー』	6. 最初と最後の頁 65-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中地幸・羽田美也子・星野文子	4. 巻 7月号
2. 論文標題 「ヨネ・ノグチ日英作品選・解説」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『現代詩手帖』	6. 最初と最後の頁 28 - 37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 中地幸
2. 発表標題 浮世絵と詩の世界－アメリカ詩と野口米次郎を中心に
3. 学会等名 ジャポニスム学会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中地幸
2. 発表標題 野口米次郎の日本美術論とその背景
3. 学会等名 ヨネ・ノグチ学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sachi Nakachi
2. 発表標題 Yone Noguchi 's Queer Literary Quest in the US and England at the Turn of the 20th Century
3. 学会等名 18th Hawaii International Conference on Arts and Humanities（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sachi Nakachi
2. 発表標題 Poetry as Modern Art: Shuntaro Tanikawa 's Exhibition in Tokyo and a New Possibility of Literary Museums
3. 学会等名 ICLCM conference（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sachi Nakachi
2. 発表標題 Laurence Binyon's Influence on Yone Noguchi
3. 学会等名 17th Hawaii International Conference on Arts and Humanities (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中地幸
2. 発表標題 模倣と剽窃の異国ロマンス—アメリカのジャポニスム小説
3. 学会等名 Modern Japan in the Eyes of Western Women (ブルナ・ルカ シュ科研「チェコ女性作家B・M・エリアーショヴァーと日本旅行記・ジャポニスム文学の研究」国際研究会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高木陽子、村井則子、稲賀繁美、グレッグ・トーマス、南明日香、馬淵明子、石井元章、木田拓也、中地幸、ソフィー・バッシュ、橋本順光、高馬京子、藤原貞郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 思文閣	5. 総ページ数 352
3. 書名 ジャポニスムを考える—日本文化表象をめぐる他者と自己	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------